

若者たちの新たな門出に合わせるかのように、本城橋袂の紅梅、薬医門脇の白梅が満開を迎える中、知道会の江幡会長、奨学会の寺崎会長をはじめとするご来賓、保護者の皆様をお迎えして、このように盛大に卒業式を挙行できますこと、大変ありがたく、心より御礼申し上げます。

まずは236名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。また、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。

今回卒業を迎える学年は、本校が1学年6クラスとなった最初の学年です。236名という卒業生の数は、最も卒業生が多かった1966年の587名から6割も減っています。

しかし、皆さんの学年は、人数の少なさなど微塵も感じさせない、存在感のある学年でした。

今年度の学苑祭のテーマであった「いろは」のとおり、多彩な個性と才能が輝く、カラフルな集団でした。

本校伝統の自由討論で、毎度お決まりのネタを披露する者や「そんなものは討論ではない」と正論でたしなめる者。論客として名高い大学教授に対し、堂々と異なる意見をぶつける者。真面目に謝辞を述べる中で、なぜか笑いを巻き起こす者。皆さんの自由闊達な発言を聞くのが、いつも楽しみでした。

部活動でも、今年度全国大会に出場した山岳部、陸上部、放送部や、昨年度「あと一步で甲子園」というところにまで迫った硬式野球部など、輝かしい活躍が多々見られました。

一方で、高校生活、思うようにはいかなかった、輝きを放てなかった、そう感じている人もいるかもしれません。

ここで、今から40年前の1985年に、まさにこの体育館から本校を巣立っていった2人の生徒の話をして。一人は帰宅部、もう一人は硬式野球部の生徒です。

帰宅部のほうは、心優しく、目立たない生徒。残念ながら、受験した大学には、ことごとくご縁がなかった。

野球部のほうは、やんちゃで、勉強への意欲が全くわからず、大学に進学すらしなかった。

卒業式の時点では、振るわなかった2人。その後どうなったか。

帰宅部のほうは、浪人時代、周りの勉強に打ち込むレベルの高さに驚き、負けじと勉強して力を伸ばし、東大に合格。卒業後、地元発祥の企業に入社してIT部門などで頭角をあらわし、来月、社長に就任する。日立製作所の徳永俊昭さんです。

野球部のほうは、3年間フリーターをしたあと、一高の先輩が営む地元企業に何とか就職。30歳で東京のコンサルティング会社に転職したことを機に、一念発起して仕事に打ち込み、その後独立。FCEという会社を率いて、東京証券取引所に上場する企業へと育て上げた。石川淳悦さんです。石川さんいわく、「人生は長期戦。どこで種が芽吹き、花を咲かすか、分からない」。

皆さんは、これからの人生において、これからの社会において、必ず大輪の花を咲かせます。

いつ咲かせるか、「正解」は誰にもわかりませんが、大事なことは、その日に向けて、「備えよ、つねに」「Be prepared」。至誠一貫、堅忍力行の校是を胸に、うまず、たゆまず、諦めず、そして驕らず、誠実にわが道を進んでいってくれることを願うとともに、「花咲くを待つ喜び」を今日この場に集った全員で分かちあいながら、式辞を結びたいと思います。最後に改めて、卒業おめでとう。